

# ひとまわり以上も年上の「親友」

新井 宏

先号の『まんじ』一六九号に「日金工創立五十周年記念論文」として四十年ほど前に書いた「ヴェネチヤの歴史に学ぶ」をそのまま紹介した。

その冒頭には

いま、杉本室長からお借りした「海の都の物語」「続海の都の物語」を感激と興奮を持って読み終えたところである。人口わずか10万人の通商都市国家ヴェネチヤや共和国が地中海に覇を唱え続けた1000年の歴史……それは決して強大国が強大国として存在し続けた歴史ではない。

と書いている。

社内用の論文としては「杉本室長」だけで何の問題もないが『まんじ』に転載するに当たっては、注釈をつけるべきだと思った。しかし我が生涯の最良の親友《杉本正勝さん》を紹介するには、あまりにも準備不足であった。次号までに調査して、満足出来る形で載せたいと思っ

た。

我が人生、不思議なことに「ひとまわり」も年上の「親友」にとっても多く恵まれていた。私を直接間接に導いて下さった方々を「親友」などと気安く言うべきではないが、「師友」とか「畏友」と言うと、何かよそよそしく心を満たさない。やはりたまたま年齢が異なっただけの「親友」と呼びたい方々なのである。

さて、通り一遍の親友《杉本正勝さん》の紹介ならいまずぐにでもできる。既に『まんじ』にも数編にわたって部分的に紹介しているので、まずはそれを引用しよう。

『まんじ』九六号(2005.5)「卑弥呼の鏡の焦り」

……筆者は四十数年前(現在基準では六十数年前)、日本金属工業というステンレス鋼專業メーカーで新

入社員として勤務していた。その時に出会ったのが、先輩で生涯の友となった杉本正勝博士である。その頃、杉本博士は日本で初めて蛍光X線分析を工業用として使うために悪戦苦闘しておられた。たまたま私は物理屋であり、業務とは無関係ながら、勝手に研究の手伝いをして、蛍光X線分析について多くのことを学んだ。その時に思ったことは、蛍光X線分析を金属遺物や文化財に適用したならば多大な成果を挙げることができるだろうという確信であった。できるならば、文化財保護委員会にでも転職して、片っ端から遺物の分析をして見たい。そのような願望は結局実現できなかつたが、今では考古学の分野で第二の人生を謳歌している。これも杉本正勝博士のお陰であると日ごろ感謝している。……

### 『まんじ』一五八号(2020.11)「愁想のシルクロード」

……我々の世代、シルクロードといえば朝日新聞に昭和四十三年から四十四年にかけて連載された井上靖の『西域物語』を想うであろう。私はまだ単行本も出てない時に、畏友杉本正勝氏から、その新聞切抜きファイルをお借りして読んだ。

畏友などと気軽にいうが、一回り以上年上の会社の大先輩。その杉本氏が蛍光エックス線分析を日本で初めて工業用分析に導入しようと悪戦苦闘してい

た際に、エックス線や統計学になじんでいた新入社員の私が職場も異なるのに勝手にお手伝いをしていった。それは氏がその成果を「博士論文」にまとめ上げる頃まで続いた。

その間に、博学多識な杉本氏から戦前の知識人の教養とも言うべきものを幅広く学んだ。いつも歴史は共通の話題であり、そのなかでも「シルクロード」を語り合うのは心躍る瞬間であった。私の「趣味の骨格」が定まったのは、全く杉本氏のおかげである。……

《杉本正勝さん》は私より一年早く日金工に中途入社した京都大学で農芸化学を専攻した化学分析のオーソリティーであった。私は東京工大の放射線物理を専攻し趣味で統計学を勉強していた新入社員、ともに歴史や考古学を趣味とすることで共通点はあったが、《杉本さん》が分析化学、私が物理計測という正反対の世界を専攻していたのがよい組合せになった。それが蛍光エックス線分析の工業的な活用という先端技術の開発で年齢に関係なく、しかも職場や地位にも関係なく、協力し合う関係を築いたのである。

《杉本さん》が直属の上司であった時代も五年ほどはあったが、二人の間はいつも「親友」であった。

ついでに《杉本正勝さん》が亡くなられた時、そつとご家族に渡してお棺に入れた頂いた弔辞の原稿が手元に残っている。それを示そう。

先輩・上司であった杉本さん、しかしそれにもまして我が生涯の友であった杉本さん。

昭和三十五年、私が日本金属工業に入社して間もなくのことでした。隣の職場に居られた杉本さんに誘われ、川崎駅の喫茶店で、歴史、社会、芸術、山などなど実に多くの事を語りました。まだ職場生活になじめなかつた当時の私にとって、会社にもこんなにも素晴らしい方が居られると云うことが、どんなに心強く感じたか、昨日のことのように思い出します。杉本さんがおられなかつたら、あるいは別の道を歩んだのではないかと思つています。

その日から間違いなく私も杉本さんのフアンの一員になりました。杉本さんのような人生をおくりたい、それが私の目標であり、あこがれでした。その想いは今日に至つて益々強固なものとなり、私の人生観そのものになりました。少なくとも杉本さん無くして今日のような私が形成されなかつたことだけは間違いありません。人が人に影響を与え得ることは人生の快事だと思います。それが杉本さんでした。

杉本さんは、日本金属工業には私よりちよつと前

に中途入社されました。当時蛍光X線を工業分析に用いると云う先端のお仕事をされていました。先端技術だけに苦難の連続でしたが、その技術をもとに東京大学から工学博士号を授与されました。その時隣の職場について、物理分野のお手伝いを買つて出ていたのですが、ある時データ解析の必要から、まだ当時としては高価でなかなか利用の出来なかつたコンピュータの活用を思い立ちました。計算センターを利用すると一度の計算で月々のお給料が飛んでしまう程でしたが、結局それを何回も繰り返し、杉本さんには大変なご負担をおかけしてしまいました。その計算センターは奇しくも杉本さんのお亡くなりになつた飯田橋の警察病院のすぐ前にありました。奇縁を感じております。

会社では研究開発本部長をお勤めになつたあと、晩年は蓼科の別荘で悠々自適の生活で過ごされることが多かつたのですが、そこには仲間と共にしばしばお邪魔いたしました。もつとも現役の時から職場の仲間達を引きつれて別荘に立てこもり、遊びを兼ねた合宿などをしばしば行つておられました。そこで着想され実現された技術や生産方式がいくつもあります。

その別荘に置かれていた交流ノートは杉本家の貴重な思い出であるばかりでなく、私達にとりまして

も貴重な歴史です。文化・芸術の香りを漂わせた別荘で過ごした日々から、どれだけ刺激を受けたか計り知れないものがあります。

元同僚の方々とも親密な交流を続けられておられました。皆さんで行かれた外国行の楽しいお話にはいつも戦前の教養を感じさせるものがありました。

明日は、それらの先輩方もお迎えして、私達の部門で最大の行事となっております第十七回研究技術発表会が行われます。これを始められ育てられたのも杉本さんでした。その日を待たずに逝かれてしまった杉本さん、共に語るべきことをあまりにも多く残したまま、あまりにも早く逝かれてしまった杉本さん。この大きな空白をどのように埋めて行ったら良いのか、失われたものの大きさを改めて感じます。

我が人生の師であり、生涯の友であった杉本さん、安らかにお眠りになつてからも、生ける杉本さんを想い、共に語る人生を続けて参りたいと思っております。

平成六年十一月二十四日

以上で《杉本さん》の人柄の一端は紹介できたと思うが、もう少し補足しておきたい。

(1) 《杉本さん》はどの職場に所属していた時も、出社して最初の仕事は「コーヒー淹れ」であった。それも化学分析で鍛えた本物の手順で、しばしば周りの職員にも振る舞つて下さった。お茶の歴史にも詳しくかった。

(2) 海外出張の時は、普通カメラを持参するが、その代わりにヨーロッパの音を録音して来て悦に入っていた。土産話は戦前の欧州映画の名画面との対比が多かった。

(3) 蓼科の別荘は杉本家の持ち物ではない。スター食品という果汁の製造会社の所有物であったが、我々まで勝手に利用できた。それは、製品の果汁が保管中に発酵してクエン酸を生ずると濁つて困っていたのを、最初からクエン酸を加えて濁らせることで《杉本さん》が解決したからである。スター食品は現在でもクエン酸入りの食品に特徴を持つ会社である。後に知つたが杉本さんの奥さんはスター食品経営者の森田家の出身である。

(4) 《杉本さん》のルーツは加賀藩の数学者三角風蔵だという。本多利明の弟子で、測量や風砲の知識によつて加賀藩主から三角の姓と風蔵の名前を賜つたという。杉本家は養子先で、《杉本さん》の実父や養父の話題となると正確な知識がなく混乱していた。三菱財閥とも関係があつたよう、満鉄に関連

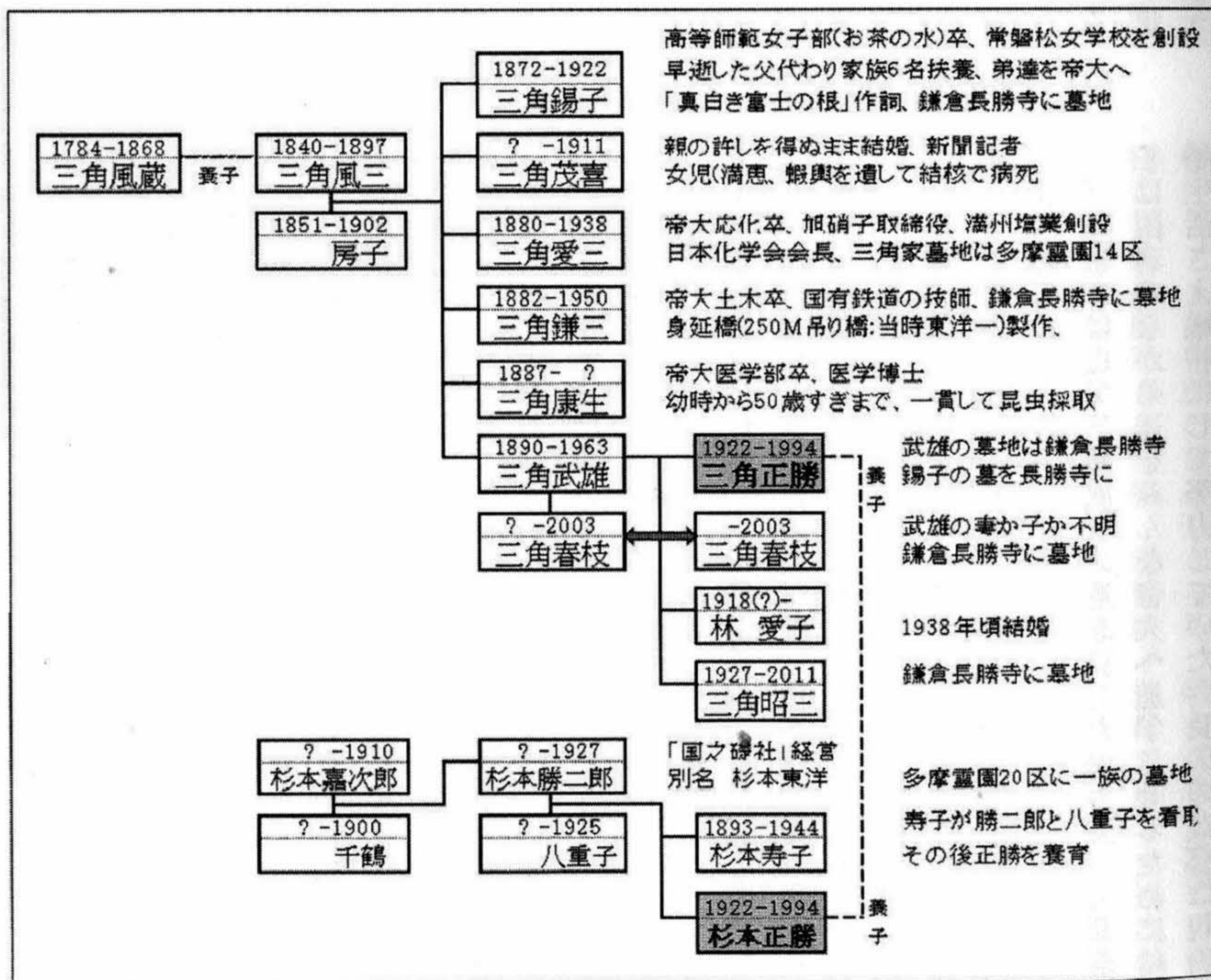
する大陸浪人だとか、『真白き富士の根』の作詞者三角錫子は伯母だとか聞いていた。

(5) 杉本さんの趣味はスキーや登山、これは私の趣味でもあり、よく話題となったが、旧制高校時代の話のように記憶している。偶々『山小屋』と言う昭和二十四年四月号に「春の芝倉沢」と言う記事を見つけた。旧制成蹊高校山岳部OBという肩書きで書いてある。まだ戦後の食糧難の時代、良くこんな雑誌をだしていたと思う。他に蝶の収集家でもあった。

このように《杉本さん》について知ることを補足してみると全体像を益々知りたくなる。ここからが、本稿の主題である。

### 一、三角家と杉本家の家系図

三角家から杉本家に養子で入ったことは聞いていたが、何かその事情を知るのには躊躇われた。特に秘している様子もなかったが、杉本さんが話すのを伺うだけにとどめていた。だから、実父と養父の家族関係が入り交じって記憶されてしまい、杉本さんの人格形成の背景を正確に知



るのが難しかったので、資料を纏めて家系図を作ってみた。家系図探索の基本はまず三角家、杉本家の墓石を調べることである。これは比較的簡単にできた。あとは、文献や伝承である。三角家も杉本家も国会図書館で調べるとかなり手応えがある。ただし、ひとつ資料が見つかるたびに相互関係に矛盾があり、試行錯誤の連続であった。したがってその探索の経過について述べたいが、まだ説明が不十分で確かな証左を示せない。取りあえず、判りやすさを優先して両家の家系図の試案を示す。

この調査で得た最大の成果は、三角武雄を《杉本さん》の実父と確定できたことである。もちろん、そのことは《杉本さん》に伺っておけばなんなく判明したことであるが、実はその調査の過程で《杉本さん》もおそらくご存知なかったことがいくつも判ってきたのである。

それは、三角武雄が若き日の夢野久作と青春を共にして、相互に大きな影響を与えていたことが、川下俊文の研究論文『夢野久作の受験生時代とその交友』で詳細に明らかにされたからである。

まず、明治四十三年二月十一日(金)の夢野久作の日記を紹介しよう。

私は三角氏の性格に親しみを抱いた。なぜなら、彼は如何なる場合にもとても敏感である。彼は小説を愛している。彼は熱心に人生の疑問をつかもう

とする人で有り、物事の三要素——知性・情熱・義務——を観察している。彼が神田へ本を売りに行くとき、私も同行して目の辺りにしたのだが、彼は東京をよく知る人である。彼は強固な意志をもち、困難な苦闘を続けながら、弱者に対しては優しい心をもっている。

これらの条件によって、私は彼を愛するようになった。毎晩、私は彼と一緒に勉強するし、彼が寝床に入るのを見送ったあとも、彼の寝顔を眺めてい

る。そして毎朝、彼は私の間抜けな寝顔を見て、優しく叩いて起こしてくれる。

ああ！私達はなんと幸せな若者だろう！  
この日付は姉の三角錫子が、逗子開成中学生十二名の七里ヶ浜沖遭難を悼んで『真白き富士の根』を作詞し、二月六日の追悼式典で鎌倉女学校の生徒達に歌わせた日の直後である。ちなみに久作の日記には三角錫子の弟の鎌三、康生と共に武雄も東京の開成中学に通っていたことが記されている。この時、武雄は二十才で久作より一才年下、ともに高等学校入学をめざす受験生として千駄ヶ谷に同宿していた。

三角家では亡父三角風三の遺志にしたがって、三角錫子は困窮のなか弟達をみんな帝大へ進学させるために結婚生活さえ犠牲にして努力していた。長弟の茂喜は親の

許しを得ずに女性と同棲して義絶されてしまっていたが、愛三、鎌三、康生と続く三名は一高から帝大へ順調に歩を進めていた。そのなかで武雄は高校受験に二回も失敗したらしい。そのためか武雄は岡山の六高に志望を替えていた。夢野久作も政界の黒幕と称された杉山茂丸を父に持ち、大学進学を支持しない父親との葛藤を抱えていた。

おそらく、川下俊文はこの論文を発表した頃、東大大学院博士課程に在籍していたので、彼の「博士論文」として記述したものと思われるが、武雄に関しては、三角風藏から始まり、武雄が戦後になって社会生活を隠棲するまで、丁寧を追いかけている。私のように『まんじ』に記載するための資料探索とはレベルが異なり正確である。

夢野久作の日記の最後に武雄が現れるのは、明治四十一年(1915)九月に武雄が岡山の六高に去った時で、僅か二年弱の交際であった。したがって、その後の武雄の消息はひとえに川下俊文の調査のおかげである。

武雄は六高では二回留年し大正四年(1915)、二十五才で卒業、京都帝大法科に入学したが大正六年まで一年次に留年、大正七年以降は学席簿に載っていないので退学したと考えられる。

退学後、武雄は日本での生活に見切りをつけて中国に

わたり、上海航路の事務長となる。昭和三年(1928)、営口に支店を開業。その後、満鉄の子会社である大連汽船の上海副支店長、天津支店長を勤め、白河流域の責任者にまで出世している。

昭和十五年には天津日本図書館評議員の職にあり、同十九年には天津市第三十七次居留民会通常会議の議長を務めている。すでに五十歳代の武雄は、天津の日本人居留民社会の重鎮になっていたようだ。日本の敗戦後に引き揚げて鎌倉に隠棲し、昭和四十一年に死去。姉・錫子とともに鎌倉市材木座の長勝寺に葬られている。

以上の川下俊文の調査により、武雄が「満鉄に関連する大陸浪人」であったことは動かない。

養父の杉本勝二郎は明治二十二年(1889)から明治三十二年(1903)にかけて自ら経営する「国之礎社」から華族列伝、明治忠孝節義伝、征清武功鑑、列国連合支那戦争記など相次いで二十巻ほどを出版していたが明治三十四年(1901)以降は一冊も確認できない。勝二郎の没年は昭和二年(1927)であるから大正年間、病に伏せていたのかも知れない。

杉本正勝が生まれたのは大正十一年(1922)であること、名前に「勝」の文字を含むことから、出生時に養子縁組が行われた可能性が高い。武雄は正勝の生まれた頃、既に中国に渡っていたので、三角愛三の斡旋であろうか。

しかし奇妙なことに三角武雄が『三角愛三追悼録・思ひ出づるままに』に載せた追悼文「十ちがい」には、その件について全く触れていない。どうやら「養子縁組」は武雄が自分のルートで行ったようなのである。

養父の杉本勝二郎は明治二十二年(1889)二月、帝国憲法発布に合わせて早くも『帝国憲法(英独参照)』を名古屋の東壁堂から出版している。東壁堂は江戸時代から漢籍や葛飾北斎の絵画などを出版している老舗である。勝二郎は出版業に意欲あり、名古屋に住み東壁堂で修行していたようなのである。もともと『帝国憲法』はこの年、百社ほどから出版されており、コンクールの様相があった。その中で、英独憲法との対比をつけているのが注目できる。

その後、勝二郎は「国之礎社」を興し自ら執筆者、編集人を兼ねて、二十余巻の「列伝」等を出版している。

## 二、三角家関係者の経歴等

三角家と杉本家の家系図試案をつくる段階で、その流れに載っている情報はかなり書き込んだ。ここでは主要人物の経歴等を補足したい。

### 2-1 三角風蔵(1784-1868)

三角風蔵の名は加賀藩の科学技術史の冒頭を飾るが、一般には良く知られていない。

河北郡二日市村の頭振(水呑百姓)池田屋又三郎の次男

で文化二年(1805)金沢に出て割場付小者(低位の足軽)になり、江戸勤番を命ぜられた時に小石川の音羽に塾を開いていた本多利明に師事し和算を学び、文政二年(1819)に三十七歳で免許皆伝となった。

やがてその算学の能力を認められ金沢分間絵図の作成に参加し、文政九年(1826)大組足軽に昇進し二十俵を受け、その後も藩の測量・天文方行政に携わり上役に認められたという。その結果、藩主の御寝所番や金山方書役、鉄砲所勤務なども勤めたと記載する資料がある。おそらく士分に昇進していたのであろう。御寝所番の時のことであろうが、藩主前田斉広から、測量術に通じたこと、「三角」姓を、藩有の風砲(圧搾空気による空気銃)の修理・保管を担当したことで「風蔵」の名を賜ったという。斉広は文政七年(1824)になくなっているので大組足軽に昇進したと矛盾するが、士分に昇進したことは、間違いないと思う。

足軽身分であった三角風蔵についての公的な記載は乏しいが、他に三角風蔵が日本において始めて気球を造り、本多利明の屋敷から飛び上がったが隣家に墜ちたとの伝承もある。また文政十年(1827)には河北郡高松の海岸で地球の半径の測定も実施したという。伊能忠敬が『大日本沿海輿地全図』で能登半島を測定したのは享和三年(1803)であるが、その頃、加賀藩は測定に非協力的であった。



風蔵は男の子にめぐまれなかった。ひとり娘の柳に養子を迎え、男の子を得たが幼少で死亡、後を追うように柳も亡くなったので養子は家を去った。

その後再び養子に迎えたのが加賀藩家老山崎家の家令をつとめる八十石取りの川崎家の十九歳になる忠一すなわち三角風三である。妻の房子も夫婦養子であったのである。風三は風蔵の弟子筋であった可能性がたかい。それは長女の三角錫子が女子高等師範(後のお茶の水大)を卒業して数学教師となっているからである。

慶応四年(1868)風蔵は八十五歳で世を去ったがこの年に明治と改元され、激動の時代がはじまった。明治三年(1870)の廃藩置県で風三が県庁に勤めることができたのは数学の素養によってであろう。長女錫子が生まれたのは翌明治五年(1872)である。

しかし風三は下級官員に甘んじる気がなく、武士の商法で事業を始めて失敗し、家屋敷を処分し、明治十年(1877)、妻と義母、それに長女錫子、長男茂喜を連れて金沢を去り、名古屋に向かった。西南の役で警察力に不足が生じていて巡査の募集があったからであろう。

名古屋では九等警部(巡査)として愛知県庁に勤め始め、明治十八年(1885)には静岡県庁の五等警部(警視)に栄進し明治二十八年(1895)まで勤務、終わりの四年間は引佐郡(二町六村では現浜松市に相当)の郡長であった。

退職は五十五歳の時なので、当時の慣行によるものであろう。

その翌年、三角家は錫子が北海道勤務で母や弟達と暮らし始めたので二重所帯を解消するため、風三は北海道に向かったが津軽海峡の船中で脳溢血により亡くなった。

たいした遺産もなく、その日から錫子が三角家を背負って行かねばならなくなった。

### 213 三角錫子

錫子の自叙伝『涙と汗の記』によると金沢の士族町で産声をあげたという。屋敷裏を流れる瀬の早い川や士族町の崩れかかった長い土塀の記憶があるというので長町武家屋敷周辺であろうか、三角家が士分となっていた証拠だと思う。

明治十年、名古屋に向かった錫子は六歳で小学校に入るが、それ以前から漢文の素読指導を父から受けていたので成績は抜群であった。

ただし、十一歳の時眼病を患い、各地の小学校から選抜して「學術の競争」が行われた時、参加できなかった。そのことが、半狂乱になるほど錫子に上級校への進学の志を抱かせた。

明治十八年(1885)風三が静岡県庁勤務で静岡に引っ越すと折から、創設されたばかりの女子師範学校に入学した。しかし希望した学力レベルと合わず、すぐに退学し

てしまふ。

そして男子に混じって漢籍や英語の学習を怠らず、向学心に燃えて明治二十一年(1888)に上京し、女子高等師範(現お茶の水女子大)の補欠募集に応募、百人以上の応募者中、進級試験まで進んだのはわずか三名、その中で十九歳の最年少者であった。

錫子は、女子高等師範を卒業すると、明治二十六年(1893)二十四歳で北海道の札幌女子小学校に赴任した。北海道の女子教育の中心校で、高等師範を卒業したということで、給料は校長先生と同額の二十五円であった。そこで錫子は、弟たちの面倒もよく見る充実した生活を送っていたが、長弟の茂喜が両親の反対を押し切って結婚同棲し家を出てしまった。

二十六歳になった錫子に、私立学校を経営していた札幌の資産家との結婚話が持ち上がり、翌明治三十年(1897)に結婚した。しかし半年で別居し四年後には離婚している。錫子はこの「結婚」について自叙伝に一言も書いていない。代わりに「ここに五年間私の暗黒時代がある。それは涙の時代であった」と記す。

そのため自叙伝だけを読むと流れが判り難い。しかし、この五年間は「暗黒の時代」でもあったが三角家の「光明の時代」につながった。

父の死に続き母の死。嫡男たるべき茂喜は「望みのない子」、十七歳、十五歳、十歳、七歳の四人の弟たちは

姉の涙ばかり見ている。子供は必ず全員大学への父の声が響く。しかし弟たちは高等学校を断念して軍人になるとか、商店へ奉公にでるといふ。

四人も抱えていないで養子に出したらとか、ひとり養子にできれば後の子の学資を負担するという申出も断つた。諦めなかったのは全員大学へ入れたいという父の言葉であった。弟達の世話をするため、錫子は上京し東京女学院の教授になる。伊藤博文が中心となって設立した学校で華族女学院と並ぶ名門校。しかし結婚している身であり、いったん札幌にもどる。

明治三十二年(1899)、愛三は脚気で二年遅れたが鎌三と一緒に一高を受検し共に合格する。

そして愛三が一年次を終了した明治三十三年から三菱岩崎家の十四歳の岩崎輝弥の家庭教師となり、以降五年間生活を共にして岩崎家から万事世話を受けるようになる。続いて鎌三も同様な処遇を受けた。真に地獄に仏、一家蘇生の思いであった。錫子は明治三十四年正式離婚して横浜女学校に勤め始めるが、その後東京高等学校に移る。

結核が進展していた。弟達を念願通り帝大に学ばせ錫子は逗子の新宿海岸に転地する。病状はやや安定してきた。錫子は明治四十一年(1908)三十七歳で鎌倉女子校の教師として再出発した。

鎌倉女学校は、弟達が学んだ東京開成中学や逗子開成

中学と同系列の兄弟姉妹校。

明治四十三年(1910)一月二十三日、逗子開成中学のボート海難事故が起こる。

この事故で錫子が急遽作詞した『真白き富士の根』が二月六日の追悼大法要で、鎌倉女学校の生徒達によってインガルス曲に合わせて歌われた。三角錫子が有名なのは、この『真白き富士の根』が歌謡曲や映画となったからである。そのため後に錫子を作詩者とすることに異論がでる。

実は、筆者はこの異説の探求に興味がありその仮説まで準備し、本稿のタイトルに『真白き富士の根』を入れるつもりであったが止めた。錫子が、自叙伝で一行もそのことに触れていないからである。ただ、天津にいた錫子の末弟武雄が昭和十七年に『真白き富士の根』の楽譜を復刻していることだけを述べるに止める。

錫子は、大正五年(1916)に渋谷の地に、常磐松女学校を創設した。四十四歳の時である。四十九歳という若さで亡くなる。武雄が昭和十三年(1938)に建てた鎌倉長勝寺の墓に眠る。

#### 2-4 三角愛三

愛三は帝大を卒業すると兵役を経て明治四十一年(1908)旭硝子に入る。五年間家庭教師として教えた岩崎輝弥の兄岩崎俊弥が経営する会社である。大正四年(1915)欧米各国に出張、各工場長や本社技術課長を歴任

し昭和三年には取締役就任、その後満州塩業等の理事長や取締役も兼ねる。晩年には帝大等で教鞭もとり、昭和十一年に日本化学会の会長を務め、昭和十三年(1938)享年五十八歳で卒す。

【三角愛三追悼録】と言う三冊の追悼集がある。

『三角愛三論文集』、『クリスタル(三角愛三小品集)』、『思ひ出づるままに』である。

愛三の人柄が良く表れているのが『思ひ出づるままに』であり六十八名の方が寄稿している。主として趣味に關連する稿を選んで読み、項目を挙げると、短歌(竹柏会)、尺八、乗馬、美術(馬の彫刻)、スキー、登山、読書(蔵書)、そして交友関係と実に多彩である。《杉本さん》のスキー、登山、読書などの趣味は愛三の影響を受けたのであろう。三角家関係者からは三角武雄が「十ちがい」を寄稿している。十歳年上の愛三との思い出を七編の小エッセイにまとめているが、書き方が洗練されており、《杉本さん》を思わせるできである。

それは愛三の随筆を十二編載せた『クリスタル』が博識と洒脱な文章で構成されていて、やはり《杉本さん》を想わせる。

その他にも武雄の娘・林愛子の「三角様の小父様を想ひて」を読むと、ヨーロッパ出張の長かった愛三は何かとヨーロッパ風で葉巻をくゆらせていたという。コーヒーもその影響であろうか。

《杉本さん》が農芸化学を専攻したのも愛三が日本化学会会長を務めたこととか、愛三の長男省三が分析化学の専門家になったことも影響しているであろう。

## 215 三角鎌三

鎌三は愛三と同じく岩崎家からの支援を受け帝大工科大学土木を出て、国有鉄道に入った。

大正十二年に完成した身延橋を設計施工したのが三角鎌三である。富士川が暴れ川のため、普通の橋桁式では流失のおそれが大きいため、総長二百五十メートルのワイヤーロープ吊り橋方式が採られ、当時東洋第一と称されたという。設計に当たってはアメリカの吊り橋を視察してきた。

## 216 三角康生

帝大医学部を出て医学博士。三角武雄が書いた追悼録のなかの「十ちがい」のなかに、「七ツ八ツから五十過ぎまで一貫して昆虫採集を楽しんでいる康チャンは幸福だなと思う」とある。《杉本さん》の昆虫採取は康生の影響であろう。

## 217 三角武雄

《杉本さん》の実父。大正四年(1915)、京都帝大法科に入学した年に、兄愛三がベルギー等に出張するのを見送り神戸港でミネソタ号二万トンに乗船する。どうも営口まで同行したような書き方である。「その後種々の変化に合い、日本はいやだと支那に行く。革命戦争だの内

乱だの張作霖の爆死だの、舞台は日本より面白いなど感じていた」と述べている。

最初は上海航路の事務長になり昭和三年(1928)には営口支店長、その後、満鉄の子会社である大連汽船の上海副支店長、天津支店長を努め、ついで白河流域管理の最高責任者となる。満鉄の子会社とはいえ、所有船舶では日本郵船、大阪郵船に次ぐ第三位の大企業であった。当に《杉本さん》が言う「満鉄の大陸浪人」としても大物であった。終戦後引き揚げて、鎌倉で悠々自適の生活を送った経済基盤も納得できる。

なお、武雄は昭和三年(1928)までに姉三角壽々(錫子)の養子となっている。

## 218 三角春枝

最も重要な人物なのであるが、武雄の妻すなわち《杉本さん》の実母なのか、武雄の長女すなわち《杉本さん》の実姉なのか決めかねている。

前出の武雄の追悼録「十ちがい」の中の最終稿に「隔離性下痢」という項目がある。そこに天津を訪れた愛三を春枝と愛子が案内する記事がある。愛三が亡くなる一年前の昭和十二年(1937)のことである。

愛子は昭和十四年(1939)に書いた追悼録では結婚して林愛子と名前が変わっている。昭和十二年頃には若くとも十八歳位だったと想定する。

ここで関係者の昭和十二年(1937)時の年齢を整理する

と、武雄・四十七歳、愛子・十九歳、杉本正勝・十五歳、正三・九歳である。春枝が亡くなったのは平成十五年(2003)であるが、墓誌からは行年が読み取れない。武雄が中国に向かった大正七年(1918)に十八歳の春枝を伴っていたとすれば、春枝は明治三十三年(1900)生まれであり、昭和十二年(1937)には三十七歳、亡くなった平成十五年(2003)には百三歳となる。全くあり得ない話ではないが、かなり不自然である。

一方、春枝が実姉で昭和十二年に二十歳だったとすると、生まれたのは大正七年である。これも不自然ではあるが成り立ち得る。ただし、愛子、正勝、正三の実母はどこに行ってしまったのか。

強いて結論を出すなら春枝が実母であった可能性の方が高いと思う。

### 三、杉本家関係者の経歴等

#### 3-1 杉本嘉次郎

《杉本さん》が昭和十二年(1937)五月に建てた多摩霊園20区の墓誌によると先代嘉次郎は明治四十三年(1910)一月二十二日に亡くなっている。偶然であろうが『真白き富士の根』の逗子開成中学のボート海難事故が起きた前日である。

国会図書館で「杉本嘉次郎」を検索すると二件の反応があった。

一件目は明治四年(1871)、京都府から下京区三条寺町に住む嘉次郎に当てた「献金」に対する感状である。金額は不明であるが個別の感状なのでかなり多額であったと思われる。付記によると嘉次郎は中岡慎太郎の郷里高知北川村の大庄屋の山下克次郎の長女を娶っている。克次郎と嘉次郎の名前には音が通じ、更にその子が勝二郎を名乗っている。更に杉本勝二郎は明治二十六年(1893)頃、下京区祇園町に住んでおり三条寺町に土地勘がある。検索結果の「嘉次郎」を「杉本嘉次郎」と見て間違いなのであろう。後日、嘉次郎は刑事を勤めた後、朝日新聞記者になったと言う。

嘉次郎が住んでいた三条寺町は三条大橋から西に四百メートルほどの地で、中岡慎太郎が暗殺された近江屋はそこから四百メートルほど東南の先斗町に近いところ。中岡慎太郎のアジトであった可能性もある。

さて、二件目は明治三十四年『穴守稻荷縁起』という小冊子を杉本勝二郎が経営する「国之礎社」と同番地の「全国社寺取調所」から出版していることである。その頃、勝二郎は出版活動を中止している。同所から父親の嘉次郎が出版したのがとても気になるのである。

#### 3-2 杉本勝二郎

同じく、「杉本勝二郎」で国会図書館を検索すると編集者としての出版実績が非常に多く見つかる。

最初は既に述べたように、明治憲法発布と同時の明治

二十二年(1889)二月に東壁堂から出版した「帝国憲法(英独参照)」である。

その後、明治二十五年(1892)から三十三年(1900)にかけて、自ら経営する「国之礎社」から次のようなシリーズを出版する。

『華族列伝』全五巻、二千七百頁、五円

『征清武功鑑(金鷄勲章伝)』全五巻、三千頁、五円

『明治忠孝節伝(東洋立志編)』三冊、九百頁、二円四十銭

『列国聯合支那戦争記』十編、五百頁、一円五十銭

『日本会社銀行録(虎の巻)』六百頁、二円五十銭

『日本会社銀行録(龍の巻)』六百頁、二円五十銭

いずれも現代の「紳士録」とか「主要企業要覧」に匹敵する内容で、該当者や会社銀行ばかりでなく、関連する関係者も購入する場合が多かったであろう。総売上高は数万円以上に達したと思われる。ちなみに現代の同業者・帝国データバンク社の年間総売上は五百億円ほどである。

業績の進展に伴い、「国之礎社」は明治三十三年(1900)に文京区本郷春木町二丁目に新社屋を建設する。

ところが翌明治三十四年に異変が起こる。「国之礎社」の出版物がいきなりゼロになってしまふのである。

魅力的な企画の終焉、大手業者の参入、勝二郎の病氣等の事故などの原因が考えられるが、編集人・発行者を兼ねる勝二郎が出版を継続し得ない事情となると病氣説が最も可能性が高い。

ところで杉本勝二郎は号を「東洋」と名乗っていた。出版物に、征清武功鑑とか、東洋立志編とか、支那戦争記とか名付けたシリーズをもち、中国との関係を重視していたことから、《杉本さん》が言う「満鉄の大陸浪人」に繋がると予想していたが、どうも時代背景が異なる。杉本勝二郎と三角武雄の間の接触を調べてもほとんど手応えが無い。

### 3-3 杉本寿子

杉本家の多摩霊園十四区にある墓所には、先祖代々墓、嘉次郎夫婦墓、勝二郎夫婦墓、正勝夫婦墓と四基ならぶ墓列に直角に杉本寿子の個人墓がある。昭和十九年五十歳で亡くなったとある。年齢を照合すると勝二郎を看取った時三十歳、その前には《杉本さん》が杉本家に入っていたであろう。墓石の造りが最も立派に見える。母親役を務めた方であろう。お茶の作法も寿子から学んだものと思う。

板東三十三所第一番に鎌倉杉本寺がある。その杉本寺の茶会に妻と一緒に参加した記憶がある。そのことを《杉本さん》に話したことがある。また奈良慈光院の茶道石州流発祥地と一緒に訪れたこともある。懐かしい思い出であるが今となっては確かめようもない。

### 四、杉本家・三角家の接点

結局のところ、いろいろ調査して見たかぎりでは、杉本家と三角家の間に直接の接点を見出せなかった。

そこで、大胆な仮説を提示してみる。

出版業で成長をとげた杉本勝二郎が「病氣」になったのは明治三十四年(1901)であるが後継者がいない。

その頃、錫子は生活苦と闘っていた。「(弟たち)四人も抱えていないで養子に出したら」とか、「ひとり養子にできれば後の子の学資を負担するという申出」があったと言う。

愛三と鎌三が相次ぎ一高に合格し、三角家は優秀との評判が生まれていたに違いない。そこで勝二郎は、他人を介して、まだ小学生の武雄を養子にもらえないだろうか」と打診した。

もちろん、錫子はその申出を断ったが、末弟なら大学卒業時に養子に出すことは出来るとも考えた。優秀な子供達を抱える家庭では、良家に養子に出すことは勲章なのである。その裏付けとなるわずかな接点を見つけた。

三角家は名古屋に明治十八年(1885)まで住んでいたが、杉本勝二郎も明治二十二年(1889)頃名古屋にいた。住所表示は全く異なるが、三角家の下園通と本重通の交差する角屋敷と、勝二郎の住んだ南伏見町はおそらく五百メートル以内の場所である。三角風三は漢学や数学に素養がある。出版業を志す勝二郎も、初めての出版に『帝国憲法』を選んで、東壁堂で修行中であった。両名の間には面識があったとしても不思議では無い。

その結果、錫子と勝二郎の間では、武雄が成人したら養子にとの話が成立したのではなからうか。勝二郎は号を杉本東洋と名乗り、支那への関心が強かった。それが武雄に影響し京都帝大で法科を選択し、中国行きにつながった可能性がある。しかし中国に行ってしまったのは後継者にはなれない。

そこで武雄に男子が生まれたら杉本家に入れるとの合意が成立していたのではなからうか。

あるいは武雄の妻の春枝は勝二郎の近親者であったかもしれない。かくして大正十一年(1922)に第二子の《杉本さん》を得て入籍したのである。

《杉本さん》がこれを読んで「おいおい新井君、相変わらな。それは違うよ。でも、僕も知らなかったことが随分ある」とでもいうのではなからうか。

#### 主な参照資料

川下俊文「夢野久作の受験生時代とその交友」『大衆文化』二十一号(2019.10)

三角錫子「涙と汗の記(自叙伝)」『婦人生活の創造』実業の日本社(1921)

三角武雄「十ちがい」『思ひ出づるままだに』【三角愛三追悼録】(1938)

三角愛三『クリスタル』【三角愛三追悼録】(1938)

社 告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

\*同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座 〇〇二七〇一〇一六四五九二一  
加入者名 まんじ